

## 【原典翻訳】ズィヤ・ギョカルプ著『トルコ化、イスラム化、近代化』翻訳（中）

小笠原，弘幸  
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門：准教授

伊藤，寛了  
帝京大学

岩倉，一澄  
九州大学大学院人文科学府：修士課程

松倉，宏真  
九州大学大学院人文科学府：博士課程

他

<https://doi.org/10.15017/6781032>

---

出版情報：史淵. 160, pp.93-112, 2023-03-14. Graduate School of Humanities, Faculty of Humanities, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 【原典翻訳】 ズイヤ・ギョカルプ著 『トルコ化、イスラム化、近代化』 翻訳 (中)<sup>(1)</sup>

(監訳) 小笠原弘幸、伊藤寛了  
(訳・訳注) 岩倉一澄、松倉宏真、岩元恕文、  
松下万弥、牟田海人、松本和希

## 《26》 第5章 トルコ主義がこうむったこと *Türklüğün Başına Gelenler*<sup>(2)</sup>

かつて、さまざまな諸民族 *kavimler* からなる官僚たちの「幸運なるカーバ神殿」であったビザンツ帝国では、コスモポリタン *kozmpolit* な階層が形成された。

この集団は、みずからの肩書きを探し求めたはてに、「都市民 *Şehri*」という言葉に決めた。「都市民」は、民族性 *milliyet* をもっていなかった。

シュルリー<sup>(3)</sup>は、レフィーイー・アフメディー<sup>(4)</sup>に宛て「わたしとお前は、ともに都市民ではない／なぜなら、わたしはトルコ人で、お前はクルド人であるゆえに」と詠んだ<sup>(5)</sup>。この詩の一節からわかるように、「都市民」はトルコ人でも、クルド人でも、アラブ人でも、アルバニア人でもなかった<sup>(6)</sup>。つまり、あらゆる民族 *milliyetler* に敵対する集団 *heyet* だった。この共同体は、アラブ人を嫌い、クルド人を軽んじ、ラズ人<sup>(7)</sup>を嘲笑し、トルコ人を侮辱していた。

アフメト・ヴェフィク・パシヤ<sup>(8)</sup>の『トルコ語のことわざ *Müntehabat-ı Durub-ı Emsal*』を紐解くと、これら民族の *kavmî* 名にかんして、一連の不適切な説明が見受けられる。都市民が用いたこうした言い回しは、これらを用いる者たちの精神性を、とてもよく示す。これらのうち、トルコ人にかかわるものだけを以下に記そう<sup>(9)</sup>。

「トルコ人は馬に乗ると、自分は君主 *bey* になったと思う」

「トルコ人たる者には、都市のなかは監獄である」

「トルコ人はへつらいを、イラン人は称賛を好む」

「トルコ人の仕事は、借りものだ」

「トルコ人は知識人になれるが、男にはなれない」

「トルコ人は宗教祭をわかっておらず、ぐびぐび *laklak* アイランを飲む」

「トルコ人と去勢牛は、雌 *ana* から生まれたために、驢馬と牛から忠告をえた」

「トルコ人の知性は、後付けである」

「トルコ人は、まとまりがない *derneği olmaz*」

「トルコ人は君主になると、まず父を殺すそうだ」

《27》この都市民が著した歴史書では、諸民族の名はつねに「知性のないトルコ人」「性悪なクルド人」<sup>(10)</sup>のように侮辱的な形で記されていた。この状況は、ナショナリズムの感情 *milliyet hissi* が感じられなかった頃には、さほど注意を引いていなかった。しかし近年、ナショナリズムの感覚 *duygu* が大きな影響を持つようになると、トルコ人以外の諸民族 *kavimler* は、この侮辱に耐えがたくなった。

キリスト教徒の諸民族 *kavimler* が自治 *muhtariyet* を要求し続ける一方、[トルコ人以外の] ムスリム諸民族は民族性を誇りに思い、民族 *kavminin* を侮辱させまいとしはじめていた。

ナショナリズム *milliyet fikri* をイスラム世界に最初に取り入れたのは、アラブ人とアルバニア人である。

エジプトではアブドゥッラー・ネディム<sup>(11)</sup>がアラブ・ナショナリズムを、イスタンブールではナイム・ベイ・フラシャリ<sup>(12)</sup>がアルバニア・ナショナリズムを、呼び起こそうと努力していた。この理想を強靱にするためには、ふたつの感情の助けが必要である。そのひとつは「民族的な友愛 *millî muhabbet*」であり、それは民族の榮譽と、民衆の伝統から生まれる。ふたつめは「民族的な憤怒 *millî kin*」であり、ある専制にたいして、怒りと敵意を呼び起こすことで生まれる。

アブドゥッラー・ネディムとナイム・ベイの両者は、この民族的な憤怒を呼

び起こすため、「トルコ人が敵であること」を広める必要を感じたのだった。アラビー・パシヤ<sup>(13)</sup>の師であるアブドゥッラー・ネディムの原理 *umde* のひとつは「トルコ人を打ち捨てよ!」という呼びかけだった。ナイム・ベイの教示はわたしたちの国で広まったから、それがどんなものかは、わたしたちはみな、ある程度は知っている。

いまから17、8年前、わたしは、ある学校に入学するためにはじめてイスタンブルに来た。のちに政界で有名になるアルバニア人医師 [イブラヒム・テモのことか] は、わたしに次のように語った。

「わたしたちアルバニア人は、専制を打倒するためにトルコ人を助ける用意があります。しかし、あなた方は知らねばなりません。わたしたちの見解では、アブデュルハミトの専制ではなく《28》トルコ人の専制なのです。今日の統治に責任を負うのは、直接的には、トルコ人です。もしこの暴虐な政府をあなた方が終わらせないならば、わたしたちはわたしたちの銃を、あなた方を代表する人物 [アブデュルハミト二世] ではなく、あなた方自身の胸に向けるでしょう」。

こうしてわたしは気づくようになった。トルコ人は進歩しえないこと、トルコ人と運命をともにすると彼ら自身 [アルバニア人] が消え去ってしまうことについて、アルバニア人の青年たちが頭を働かせ、ナショナリズムの感情を吹き込もうとしていたことに。こうした使喚は、アルバニア人青年のみに限らなかった。アラブ人とクルド人の青年たちにも、この考えを使喚しようと努めていた。さらに、トルコ人は下劣で野蛮人であると、トルコ人たちにすら信じさせようと奮闘していた。このとき、トルコ人という名称を認めるものはひとりとしていないも同然であった。

イスタンブル在住者は、自身を「都市民」と呼び、地方出身者たちを、地理的遠近にもとづき *coğrafi karabetine göre* アルバニア人、アラブ人、クルド人、ラズ人と呼んでいた。バルカン *Rumeli* の住人は一般的にアルバニア人であるし、黒海沿岸にはラズ人だけが、東アナトリアにはクルド人のみが居住していた。こうした地理にもとづいた民族性に由来する名称 *coğrafi kavmiyet unvanı* を持た

ない者たちは、より栄えあるとみなした民族 *kavimler* のうちひとつに、みずから進んで加わった。こうして、もともとトルコ人である多くの青年が、アルバニア人、アラブ人、あるいはクルド人たることを誇ったのであった。トルコ人たることを誇る者は誰もいなかった。「トルコ人」という単語は、あたかも恥ずべき名称のように、誰も名乗らなかった。「トルコ人」は東アナトリアでは「クズルバシュ」<sup>(14)</sup>、イスタンブルでは「卑俗な、村の」を意味していた。ナウム・ベイのもっとも活動的な友人<sup>(15)</sup>のうちふたりは、血筋としては生粋のトルコ人であった。彼らの使喚により、トルコ人であることに疑問の余地のないディヤルバクル出身とハルプト出身の医師たちも、みずからをクルド人とみなしていたのだった。

《29》歴史上、この哀れな状況への、第二の例は示されえない [この哀れな状況は、類例のないものであった]。国外では、ヨーロッパがトルコ *Türkiyâ* における醜聞を理由にトルコ人のみを罪に問い、国内では、ムスリムと非ムスリムのあらゆる民族 *kavimler* が、宮廷の専制、官僚の圧政、そして政府の不正について、トルコ民族 *kavmi* のみに責を負わせていた。しかし、トルコ民族は「わたしはいる」と言わないのだった。そこには [トルコ人に] 課せられた責務があったにもかかわらず、それを引き受ける者はいなかった。トルコ人たちは、民族的 *milli* 責務を引き受けない、まともに欠けた人々からなっていた。民族的良心、民族的理想を持っていない集団から、道徳、情熱、献身を期待することは無益である。そのようにして、本来とても高貴であるトルコ人が、社会的にこれほど停滞してしまったのは、ただ「自分が何者であるかを知らない」、そして「民族的責任を知らない」という過ちによるものであった。

そうだ！ ヨーロッパは正しかった。アブデュルハミト [二世] 政府の圧政の責任を負うべきは、トルコ人であった。[第二次] 立憲政後も、どの党が与党であっても、トルコ人が行動の責任を負わされた。なぜなら、この結果から被害を受けるのは彼らなのだから。アルバニア人が蜂起したとき、彼らは党派を区別せず、あらゆるトルコ人役人を放逐し、捕らえたトルコ人将兵を殺したのだった。

タンズィマート支持者たちは、トルコ性という顔に、まやかしのヴェールを下ろすことを望んだ。国語としてのトルコ語 *Millî bir Türk lisânı* はなく、諸民族のあいだ *beyne'l-anasır* で共有されるオスマン語があった。すべての民族 *unsurlar* が混じり合い、新しい民族的 *kavmi* 模範、歴史的人種 *ırk*、オスマン国民 *milleti* が生まれたのだった。この国民には、固有の言葉があるのと同様に、自身に固有の歴史もあった。

この嘘を、どの民族 *unsur* も信じなかった。それぞれの民族 *kavim* は、彼らの学校において、子どもに自身の歴史を学ばせ、自身の言葉を教えた。

《30》[第二次] 立憲政のあと、そのヴェールがさらに重要視されるようになると、[トルコ人以外の] 諸民族 *unsurlar* は「あなた方は、わたしたちをトルコ化させようというのか！」と叫びはじめた。実際、このオスマン化の政策は、トルコ化のための秘密の手段なのであった。オスマン主義 *Osmanlılık* の目的が「国家 *devlet*」ならば、そもそも、すべてのオスマン臣民はこの国家の構成員 *ferd* であった [だから、問題はない]。否、この目的が、「オスマン語」を話す新しい「国民 *millet*」を作り出すことであったならば、オスマン語はトルコ語以外の何物でもなかったために、この新しい国民は、他の名前のもとでトルコ国民 *milleti* となるはずであった [だから、問題であった]。これを諸民族 *unsurlar* はよくわかっており、彼らの民族性 *milliyet* を守るため、物質的そして精神的な諸組織を強化し、改革した。

このタンズィマートの罫に落ちた者は、トルコ人だけであった。トルコ人は、自分たちの言語は三つの言語<sup>(16)</sup> からなる「オスマン語」だけであると信じ、民衆の言葉で話したり書いたりすることを反動とみなした。タンズィマートの精神は、立憲政によって、民衆にそれを行行使する準備ができていなかった主権を与えたのに、よく使われていた言語を認めなかった。そのナショナリティや民族的歴史 *millî tarih* に言及することに、もちろん、まったく耐えられなかったはずだ。

トルコ人青年は、一方で、言葉と文学を簡略化しなければ、民族的理想が精神における歓喜と献身を呼び起せなければ<sup>(17)</sup>、民族経済の生存競争に勝ち残ら

なければ、トルコ主義 *Türklüğün* どころかオスマン主義 *Osmanlılık* とイスラム主義 *İslamlığın* もついでてしまうことを理解した。他方で、この偽りのヴェールを投げ捨てないかぎり、どんな民族 *unsur* にも、その精神の誠意を信じさせることができず、したがって諸民族 *unsurlar* の統合の目的を決して達成できないことを知った。このほか、あらゆる民族 *milliyetler* が形をなす一方で、トルコ人の栄光に言及されなければ、トルコ人青年が他民族 *kavmiyet* によって代表されてしまうことを、理解せざるをえなかった。ついに、この三つの理由によって、トルコ主義の理想が噴出した。

《31》この新しい民族の登場を、あらゆる民族 *kavimler* の民族主義者は歓迎した。「都市民」と「タンズイマート主義者」の類に属する者たちだけが、喜ばなかった。

はて、トルコ人がナショナリズムの感情に覚醒したことは、利益を、あるいは害をもたらしたのだろうか？

どんな害もなかったし、利益についていえば、数えられないほど多かった。すなわち、トルコ語を簡略化すること、わたしたちの文法が外来の規則から解放されること、わたしたちの詩が民族的な韻律 *milli vezin* で記されること、わたしたちの文学がギリシアやイランの物語から解放されて民族的英雄伝や神話 *milli menkıbeler ve üstureler* で飾られること、民族的覚醒とともにそれと分かちがたい関係にある宗教的覚醒がはじまること、わたしたちが属するウンマと国際的 *beynelmileliyet* な位置を明らかにすること、民族経済・民族的スポーツ・民族的道徳の発展、理想に殉ずる感情が若者に生まれること、諸民族 *unsurlar* との連帯の感情のおかげで相互理解が容易となること、各人が民族的責任を感じ引き受けること。

今日、民族愛を持つ *milliyetperver* トルコ人は、民族 *kavm* に害を与えないよう、これを高い水準にするよう、あらゆる行動によって努める義務があると、みずからを考えている。したがって、個人的な志向や欲望を慎み、神聖な責務のみが目に入るように努めるのである。トルコ人青年は、今日もっとも神聖な責務は、トルコ人があらゆる政治的諸政党 *fırka* や社会的諸潮流をこえてひとつ

になることだ、とよく理解していた。この統一が生まれれば、イスラムの一体性 İslamlığın vahdeti、オスマンの完全性 Osmanlılığın tamamiyeti もまた、確固たる状況となる。

トルコ民族 kavmi は、みずからの存在を認識するやいなや、アラブ人が進歩するために本当に必要なものごとがなんであるかを理解した。ほかの諸民族 unsurlar<sup>(18)</sup> が必要とするものごとをも、この新しい感情の光でもってのみ、気づくであろう。

《32》政府と諸政党の行動によって、トルコ民族が非難された、と前述した。[しかし] こうした力のよき活動によって称賛に浴するものも、またトルコ人である。

たとえば、政府がアラブ人に一連の許可を与えたとき<sup>(19)</sup>、この歩み寄りには「トルコ人とアラブ人の友愛」と[民族名でもって]呼ばれた。「政府」と「アラブ人」が、あるいは「統一進歩 [委員会]」と「アラブ人」が融和したとは、みなされなかったのだ。

ご覧のとおり、トルコ民族 kavmi は「わたしは存在している」と言ったあとその責任をよりよく認識する。そして今日、ナショナリズムの感覚を放棄することができない宗教や国家の同胞とは、より素晴らしく理解し合う方法を見つけることができる。

昨日、長期的に存在するか確信が持てないため、改革についての政府の約束をなにひとつ信じるができなかった諸民族 unsurlar は、明日、彼らの面前に責務と責任を知る不死のトルコ民族 kavmi を見つけたとき、この確固たる存在と理解しあうことができる、とわかるだろう。そして、現在しているように外国人による監督を求めたりはしなくなるだろう。トルコ人が、自身の民族性に誇りを持つようになると、諸民族 kavimler の民族性にも、敬意を抱くであろう。自身の権利と責務を認識すると、ほかの諸民族 kavimler の責務と権利も明確にしうるであろう。

自身を知る者は、他者をも知る<sup>(20)</sup>

オスマン帝国にいるあらゆる民族 kavimler がナショナリズムの感覚を抱くことを当然かつ正当であるとみなしつつも、このうちトルコ人のみを例外とする者がいる。彼らは、「トルコ人は支配的な地位にいたために、民族的 millî 権利のすべてをそもそも有しています。[トルコ人には] ナショナリティの感覚でもって取り返すような失われた利益は存在しません」と述べる。彼らが、「オスマン国家は、トルコ人の国です」と語っていたのならば、こうした異論は、おそらく妥当なものとなっただろう。しかしながら彼らは、この国家が、《33》「オスマンル」の名のもと、多民族からなる政府 beyne'l-anasır bir hükümet によって統治されていると信じている。この国家は、トルコ人の憲法によって Türk kanun-ı esasısiyle<sup>(21)</sup> 統治されていないため、トルコ人は政治の面で他の民族となんら変わらない。であるから、ほかの民族 kavimler のように、トルコ人にも民族意識 millî vicdan、民族的組織が必要なのは論をまたない。

トルコ人にナショナリティの感情が目覚めはじめると、トルコ人という単語は、さまざまな攻撃に晒された。フラグ<sup>(22)</sup>の野蛮な圧政とトルコ主義 Türkçülük のあいだに、なんらかの関係があるかのように、攻撃が企てられた。他方、トルコ主義がイスラム主義 İslamcılığa に反対するものとして非難された。

しかしながら、トルコ主義者の目的は、今日的なイスラム・トルコ主義 muasır bir İslam Türklüğü である。

トルコ主義者の、民族的理想 millet mefkursi がトルコ人たること Türklük だとすれば、宗教的理想 ümmet mefkuresi はムスリムたること İslamlık である。私見によれば、トルコ主義者には別途宗教のための綱領 ayrıca bir ümmet programları がなくてはならず、その主要な基礎は以下のようなものでなければならない<sup>(23)</sup>。

(1) すべてのムスリム諸民族 kavimleri のあいだで共通するアラビア文字を、変えることなく守ること。

(2) すべてのムスリム諸民族が術語を共通のものとするために、ムスリムたちが集まって İslam ümmeti arasında 術語会議を開催すること。術語をトルコ語、アラビア語、部分的にはペルシア語からつくること（この目的達成のために、パリ在住のトルコ人、エジプト人、インド人、イラン人学生が合意した）。

（3）すべてのムスリム諸民族に共通する教育 *terbiye* を創設するために、教育会議を開催すること<sup>(24)</sup>。

（4）すべてのムスリム諸民族のムフティー組織のあいだで、連絡を絶やさないうこと。

（5）イスラムのウンマの象徴である「三日月」の神聖さを守ること。

《34》この原則からわかるのは、トルコ主義 *Türkçülük* は同時にイスラム主義 *İslamcılık* だということである。トルコ主義者 *Türkçüler* が [同時に] イスラム主義者 *İslam ümmetçisi* であるという形によってのみ、自身を「ムスリムの民族主義者 *İslam milliyetçileri* [民族性を無視してムスリムであるということだけで一体化しようと主張する者]」から分かつのである。

というのは、ムスリム諸民族からナショナリティの感情を消し去るこのような不自然な統一を、今日、トルコ人もアラブ人も、インド人もアフガン人も、バルバル人<sup>(25)</sup>もイラン人も認めえないからである。トルコ人は、民族的理想を強めるために、宗教や祖国の同胞たるいずれの民族にたいしても、「民族的な憤怒」を喚起しようとはしなかった。[トルコ人は] イスラム主義 *İslam ümmetçiliği* を理解しないアブドゥッラー・ネディムとフラシャリ・ナイムのような轍を踏まなかった。

思うに、エジプトとアルバニアでは、キリスト教徒のエジプト人やアルバニア人の存在と連携が、この誤った行動への原因となったのだ。トルコ人はみなムスリムであるから、トルコ主義者は、イスラム主義 *İslam ümmetçiliği* に反する感情をなにかも抱かないであろう。同時に、トルコ主義者は近代化が必要であるとも理解しているため、非ムスリム諸民族にたいして、この近代文明に求められる礼節を保つであろう。

## 第6章 教育<sup>(26)</sup>

イスラム教育というとき、ふたつの考えが頭に浮かぶ。ひとつめは、イスラ

ム教 İslamiyet が教育において用いる方法であり、ふたつめは、育てられる子どもたちが、イスラムの教義にしたがって教育されることである。

イスラム的 İslamiyet 教育方法を調査するのは、教育史の範疇である。わたしたちは、この章において、歴史ではなく今日の生活を取り上げ、イスラム教 İslamiyet が教育理念のひとつであることを示すこととする。

《35》学校のカリキュラム mektep programı に目を通すと、わたしたちは、子どもに三種類の知識を教えていることがわかる。第一に、わたしたちの民族的 millî 言語および文学、わたしたちの民族史を教えている。それらは、トルコ語、トルコ文学、トルコ史に他ならない。

第二に、聖なるクルアーン、クルアーン読誦 tecvit、教理問答のような宗教的授業とイスラム史、イスラムにかんする言語 İslam lisanları を教えている。

第三に、数学や自然科学のような諸学と、この学問を学ぶために有用な外国語と、手工、スポーツのような技術を教えている。こうした概要からわかるのは、教育においてわたしたちが追及する目的は三つだということである。それは、トルコ性 Türklük、イスラム性 İslamlık、近代性 muasırlık だ。

トルコ人の父親は、その子がトルコ語を話さず、トルコ語で読み書きせず、トルコ史を知らないのを認めるわけにはいかない。同時に、イスラムの信仰と礼拝を知らず、イスラム史に無知のままにいるのを認めることはできない。この父親は、その子がトルコ人にしてムスリムとして育つのを望むと同様に、近代人 muasır bir insan として育つことも望むものだ。この場合、わたしたちにとって完全な教育は、三つの部分からなる。それは、トルコ教育、イスラム教育、近代教育である。タンズイマート以前、わたしたちの子どもには、イスラム教育だけがほどこされていた。タンズイマート主義者は、わたしたちの国に近代教育を導入しようと取り組んだ。当初は、このふたつの教育のあいだに、大きな衝突が起きた。イエニチェリの代わりに、ニザーム・ジェディーード<sup>(27)</sup> をすすめることは冒涇と考えられた。ヨーロッパの服装を身につけることは、不敬虔という風にみなされた。学校に、絵画やフランス語のような授業を導入するのは反対された。

地球球体説や地動説のような考えは、伝承 *nakl* に反すると言われた。経験的にも知的にも確かであるこの真実を確認するため、ついには伝承にもとづく証拠を求める必要が生じた。

《36》とはいえ、近代教育は、少しずつ定着し、足場を築きはじめた。しかし残念なことに、それが価値を持つようになるにつれ、イスラム教育の重要性は失われはじめた。ただ、学校のカリキュラムにおいて、宗教の授業はいまなお相当量を占めているのも事実である。しかし、イスラム教育の凋落は、量的なことではなく、内容にあった。宗教の授業は、生き生きとした形で教えられていなかった。宗教の教師は、科学的な真実をいまだ逸脱 *bidat* とみなし、こうして生徒の信頼を失っていった。また、宗教教育ではいまだ科学的方法も取り入れられてはいなかった。

そしてそのような時代に、トルコ・イスラム世界が陥った混乱とそれに続く災厄が、「トルコ・ナショナリズム *Türk milliyetçiliği*<sup>(28)</sup>」と「イスラム主義 *İslam ümmetçiliği*」と呼ばれる、ふたつの生き生きとした力強い理想が具現化する原因となった。今日、これらの災難の打撃によって目覚めた若き知性 *zekalar* は、わたしたちの失敗の責任を、教育的理想の欠如に帰している。彼らは言う。「わたしたちは、若者に民族 *milli* 教育も宗教教育も施そうとしませんでした。しかし、個々人を神聖な目的のために死に赴かせる感情は、宗教と民族 *milliyet* 感情から成り立っています。わたしたちは、子供にトルコおよびイスラム教育 *Türk ve İslam terbiyeleri* を施さなかったのと同様、近代教育 *asır terbiyesi* も与えませんでした。なぜなら、近代教育の目標は、先進諸国が生み出し利用している技術を、わたしたちも作り、使えるようにすることだからです。しかしわたしたちは、経済の分野とおなじく、軍事の分野においても、文明の利器 *asrımızın âletleri* を利用する能力がないことを示しました。科学の基準は [科学が社会にうまく適用されているのかを図る基準は]、行動 *amel* です。わたしたちは、行動における失敗によって、科学の進歩の恩恵に与っていないことを証明したのです。すなわち、専門的な科学者を育てる高等学校 *âli mekteplerimiz* も、同胞国民を育てるよう努める中等学校 *tâli mekteplerimiz*<sup>(29)</sup> も、成果を上げることがで

きなかったのです」。

「新しい生活」を重要視する報道は<sup>(30)</sup>、このような根拠 esas に基づいてタンズイマート時代の《37》教育の破綻を宣言した。現在、三つの思想家集団が、わたしたちの新しい教育の基盤をつくろうと励んでいる。トルコ民族的な教育者 Türk terbiyecileri は、新しい生活において民族的 milli 理想<sup>(31)</sup> はどのような責務をなすのかを示している。一方、近代的な教育者も、科学から実用的 amelî で経済的な利益を得るため、どのような教育方法が採用されるべきなのか示そうと努めている。こうした努力をせねばならない時代においては、イスラム教育が依拠する基盤 esas も探し求める必要があろう。

この三つの教育は、それぞれ支援し補完しあわなければならないものである。しかし、それらの受け持つ範囲とその範囲の境界が合理的かつ適切な形で決定され制限されなければ、たがいに衝突し敵対しうる。

近代教育は、物質的分野にとどまらず精神世界へ侵入するとき、イスラムおよびトルコ教育の権利を侵害するものとなる。民族的 milli 教育と宗教的教育の境界を定めることは、さらに難しい。イスラムの伝統のうち、どれが直接イスラム教 İslamiyet に属するのか、どれがアラブ人、イラン人またはトルコ人に属するのかを示すには、綿密な精査が必要である。

それゆえ「イスラム教育」は、基本的にトルコ教育と近代教育を認める一方、これらによってみずからの分野 [イスラム教育] に起こりうる干渉を引き起こさないよう努めるであろう。同時に、真のイスラムの教義と伝統を、はじめにアラブ民族 kavmi から伝わっていたり、のちに他民族から借用されたりした習慣や逸脱から、区別するよう努力するであろう。

## 第7章 理想<sup>(32)</sup>

種 tohum の萌芽は、第一に瞬間的 ânî なもの、第二に時間によるもの zamanî という二期に分けられる。受胎期 ilkah devresi と成長期 taazzi devresi である。受胎という出来事は、《38》種 cürsume のための創造的な出来事である。これがな

い限り、種は成長できない。

有機的な種が育ち、大きくなっていくように、詩人の創作や哲学者のイジュティハード<sup>(33)</sup>においても同じような時期があるのを、わたしたちは知っている。詩人が靈感を得るというのは、想像力を受胎することである。

哲学者に「直観 *hads*」が出現するのは、思考力 *müfekkire* の受胎 *mülkah* によってである。この受胎が起こったのちに、詩人の想像と哲学者の思考が宿り、遅かれ早かれ文学的あるいは哲学的な有機体を生むのだ。

民族的 *milli* 特徴を有しない人々というのは、同様に、有機体の種のようなものだ。これを、詩人の想像や哲学者の思考になぞらえることができる。それならば、民族 *millet* にも受胎と成長の時期が必要である。

民族は、大きな災厄に遭い恐ろしい脅威に向かい合っているとき、個々人の個性を飲み込んでしまう。このとき、みな精神には「民族的個性 *millî bir şahsiyet*」だけが生き残り、みな心にはこの「民族的個性 *millî şahsiyet*」の維持を熱望する以外の感情は残らない。このとき、個々人は自身の自由ではなく、民族の「独立」を考えるのだ。こうして、その偉大な感情とまじりあったこの神聖な思想が、「理想」と呼ばれ、この危機的な局面には「受胎期」という名が与えられうる。

危機的な時とは、理想が創造される日々のことである。理想は、民族的な災厄が、心を団結させて公共心 *umumî bir kalp* を作り出したとき、この統一された心から生まれる。その後、成長期において、次第に芽吹き枝を広げ、花を開かせ新たな制度を作り出すのだ。

「ドイツ人 *Cermanlik*」という理想は、プロイセンがナポレオン軍によって侮辱されるという大きな災厄<sup>(34)</sup>のときに沸騰した。それまで《39》「わたしの民族 *milletim* は人類であり、わたしの祖国は世界なのです」と述べていた哲学者 *フィヒテ*<sup>(35)</sup>ですら、この瞬間には、その骨の髄までドイツ人であると感じ、それを宣言した。

「日本人 *Japonluk*」という理想は、日本が欧米人によって、危険で侮辱的な形で圧迫された瞬間に爆発した。

フランス民族 *milleti* がイギリスの侵攻下でまさに崩壊しようとしていたとき、民族意識 *millî vicdan* が狂乱した村娘から芽吹き、彼女をみずからへの救い手としたのだ<sup>(36)</sup>。イスラエルの子らが、エジプトで破滅を運命づけられていたことがユダヤ教 *Musevîliği* を、ユダヤ人 *Yahudiliğın* がローマの専制下で迫害されていたことがキリスト教を生んだ<sup>(37)</sup>。イスラム教 *İslamiyet* の誕生も、アラブ地域が三方から政治的、宗教的侵略にさらされている危機的な時に発生した。

ある民族が危機に陥っているとき、これを個々人が救うことはできない。民族そのものが、みずからの救い手になるのである。このとき、個々人は人智を超えた *fevk'n-nasut* 精神によって魅了され、一個人の意志は沈黙し、一般意志 *umumî bir irade* があらゆる意識において「己 *nefs-i mütekellim vahde*」と化すことがわかる。民族は、個々人にたいする神聖もしくは社会的理想という形で出現し、彼らを約束された勝利や、吉報なる楽園に招待する。[民族は] エゴイストから犠牲的な戦士を、臆病者から危険をかえりみない英雄を作り出す。そして愚か者には知性を、怠惰な者に勤勉さを、無関心な者には熱意を与えるのである。

災厄と危機の時期が過ぎ去ってしまえば、精神に現れたこの理想という太陽は、もはや消えることはない。それは、民族のあらゆる行動を、内なるぜんまいのように、たえず鼓舞し続けるのである。

未受精卵 *ovule* が、その成長のために必要とする生命 *hayatî* の衝動を受精からえるように、民族を形成する諸制度もまた、それらの発展に寄与する「進化の方向性 *tekamülî inıfat, Direction evolutive*」を、理想から得るのである。ある民族に特有の文化と文明は、この方法によってのみ、形成されうる。

《40》災厄のとき、個々人を自身の精神に取り込んだ民族 *millet* の、切迫した感受性から噴き出した本物の理想は、未来の創造者である。わたしたちは、未来を見通すための物質的な道具を持っていないけれども、これについてわたしたちの精神的な望遠鏡は存在するのであり、それが理想である。

ある民族が創造的な理想を手にしたあと、もはや暗い未来に向かうことはない。約束された、吉報の都市「イラム」<sup>(38)</sup> が、日毎により鮮やかで、生き生き

としたかたちで現れて、これ〔民族〕を、〔イラム〕自身に呼ぶ。理想なき国家は、つねに崩壊する終末を待つ。一方、理想を有する諸民族 *milletler* には、政治的に来世に赴いたとしても、かならずや「死後の復活 *ba'su ba'de'l-mevt*」という吉報がある。

したがって、復活し創造する理想を有する国家は不滅で不死である。

「個人には——上から下への影響をもって〔理性的な力で〕——欲望を克服する意思の力は、あるのか否か？」と心理学者たちがいたずらに議論している。どちらの意見も正しい！ 理想を持つ民族の個々人は、意思を持っている。理想なき諸民族に、意思を持つ個々人はみいだせない。崇高な意思に導く偉大な自己犠牲、並々ならぬ献身は、理想を生み出す危機的な動乱に登場しうる。

フランス革命初期、国民議会の紛糾する会議において、すべての貴族らが、封建的特権を手放した<sup>(39)</sup>。ドイツの諸小国は、〔18〕70年の戦争における民族的な突撃 *millî hamle* の影響で、独立を放棄し、プロイセンを主人として認めた<sup>(40)</sup>。日本が「榮譽 *şeref* とともに生きるか、名誉 *namus* とともに死ぬか」を迫られたとき、みずからの意思で、将軍は、その支配権と封建的領地を犠牲にし、天皇 *Mikado* さえその絶対的な権力を放棄することをみずから選び、国民主権 *milliyetin hakimiyeti* を宣言した<sup>(41)</sup>。《41》この意思を、超個人的な力に帰した昔の「ジャブル派」<sup>(42)</sup>の営為は正しい。なぜなら個々人のなかに意思を創造し、司り管理するものが、理想だからである。個人は、この民族的「恵み *Grâce*」*millî tevfiğ* がもたらすひらめきを自身の個人的な意思とみなし、これらが民族精神から生じたということを考えられない。

理想は、その力をふたつの形で現す。

威信 *prestige*<sup>(43)</sup> と制裁 *Sanction*。威信は、理想が精神へ直接に現れることである。個々人が理想を持っているとき、精神は激しい熱意 *Enthousiasme* に満たされる。

彼らは、興奮し、熱狂し、荒々しい生活を生き、熱狂した興奮のなかへ飛び込む。個々人が、そのとき心から感じる感覚は、「神聖な *kutsiyet*」感情である。このあふれる精神は、その理想を、そしてその助けとなる事々を「祝福」し、

対立し反対する事々を「呪詛」する。理想のためには生存、利益、幸福を犠牲にするだけでなく、それを後押しするものを称えようとし、それに敵対する人々と物事を破壊し、燃やし、粉碎しようとする。

理想はこの威信の力によって個々人を社会的な夢遊病状態にし、彼らの精神に与える歓喜 *cezbe* によって、彼らを超人的な奇跡の実行へ駆り立てる。

理想の制裁力 *teyid kuvveti* についていえば、これは、威信の力の結果である。理想のあらわれへの神聖な愛に魅了されない者たちは、その力を間接的に感じる。理想に同調するもしくは反する行動は、理想に魅了された人々による反応にさらされることを、彼らは理解する。

理想を持つ共同体による称賛もしくは非難の形式で現れるこの反応は、理想の制裁力である。それは、はじめは曖昧である《42》ために、「慣習 *örf*」の形をとる。後に、体系化して「法 *kanun*」の形をとる。威信は、理想の美しさの性質であり、制裁はといえば、[理想の] 偉大さの性質である。

理想は、このふたつの性質もしくは力によって、個々人を同じ精神性においてひとつにして、すべての人々を均質な精神的本質に変化させる。子供は、「わたし」という感覚を感じる日まで、非個人的な感覚とともに生きる。「わたし」という感覚を感じたときに、この瞬間まで不分明な存在たる感覚のなかで留まっていた人格を、はじけさせる。子供にとって「わたし」という感覚を感じることは、民族 *millet* にとって理想を自覚することにあたる。しかし民族は、その自我 *benliği* を、大きな災厄のときにのみ感じることができる。災厄のときの民族的危機は、社会的な天使 *cebrilik*<sup>(44)</sup> なのである。なぜならそれは、まとまりのない民衆に民族精神 *milliyet ruhu* と家族意識 *aile vicdani* を、吹き込むからである。民族 *millet* にこの精神が吹き込まれてはじめて、それは、自身が誰であるかを、どこから来たのかを、どこへ行くのかを、どのように歴史的な任務を遂行するのかを、予感し自覚しはじめる。

追記 *Hamiş* : 理想を、「夢 *hayal*」、「目的 *gaye*」、「熱望 *emel*」、「願望 *dilek*」だと言う者たちがいる。上記の説明からわかるように、理想とは、民族が、過去の大きな危機の時に実際に経験した精神的な状況、知的な存在なのである。経

験したことがない夢でも、将来経験する予定の目標でもないのである。

理想は、現在の教師でまた未来の創造者であるとともに、過去の現実である。民族の過去から到来して、これ〔民族〕を未来に向かって押し進める知的な運動である。それゆえ、「*idée*」という語に「*idéel*」という語が由来することになって、「思考 *fikir*」という語に由来する「理想 *mefkure*」という語を、この場において使用するのがふさわしい。

## 注

- (1) 本訳稿の前編は、『史淵』第159号（2022）、119-45頁。史料解題や凡例はそちらを参照されたい。ただし初出時との異同について、本訳稿ではすべて脚注とした。前編と同じく、大意にかかわらない言い換えについては取り上げていない。
- (2) 本章の初出は、*Türk Yurdu*, 4/22 (1329), 753-60（初出時、論考のタイトルなし）。
- (3) *Seyyid Osman Süruri* (1752-1814)。アダナで生まれ同地で教育を受け、20歳を過ぎたころに詩を書きはじめた。1779年アダナの法官からメッカの法官に昇進したのち、イスラム長老ヤフヤー・テヴフィク・エフェンディに見込まれイスタンブルへ赴いた。この頃、雅号である「*Süruri*」を使用するようになる。1781年に再び法官となり、以降16年間、4か所で法官を務める。1802年セリム3世に献上した頌詩により、アナトリアの軍人法官に就任。歴史書の執筆や風刺詩を詠んだディヴァーン詩人としても著名である。
- (4) *Refi-i Amidi* (1756-1816)。ディヤルバクル生まれ。30歳でイスタンブルへ赴き、大宰相ユスフ・ズィヤ・パシャへ頌詩を献上した。その後さまざまな都市で法官を務めたあと、1816年にイスタンブルで死去。彼の著作『最愛者 *Can u Canan*』は、古典詩で著名なシェイフ・ガリブによる『美徳と愛情 *Hüsn ü Aşk*』に似せたものであり、ディヴァーン詩人としても著名である。
- (5) 原文はペルシア語。
- (6) 初出では「アルバニア人」なし。
- (7) 黒海東岸、現トルコ共和国のアルトウイン県やりゼ県に主に居住するエスニックグループ。
- (8) *Ahmed Vefik Paşa* (?-1891)。1877年にオスマン帝国議会の初代議長に就任し、更に大宰相を二度務めた。文人としても活動し、フランス文学の翻訳や、はじめての土土辞典『オスマン語辞典 *Lehçe-i Osmani*』を刊行している。『トルコ語のことわざ *Müntehabat-ı Durub-ı Emsal*』は、民衆のことわざや慣用句を収集したもの。
- (9) *Ahmet Vefik Paşa, Müntehabat-ı Durub-ı Emsal: Atalar Sözü*, Istanbul, n.d, n.p., 102. ギョカルプは、ヴェフィク・パシャと同じ順番でことわざを掲載している。

- (10) ただし、トルコ人やクルド人に限らず、さまざまな民族名に否定的な形容詞を付けて言及するのは、前近代からの決まり文句でもある。ギョカルプの解釈は、ややバランスを欠いているといえよう。
- (11) ‘Abd Allāh al-Nadīm (1845-96)。1879年にイスラム慈善協会とその学校を設立するなど貧困層の教育に尽力、アラビー運動では彼を支持する立場で言論活動を行った。支配エリート層や植民地主義勢力への対抗とエジプトの人々の団結を重視し、『祖国 *Watan*』に代表される演劇の執筆や言論活動を通して、階級を超えた団結のための啓蒙活動を行った。
- (12) Naim Frashëri (1846-1900)。19世紀のオスマン帝国におけるナショナリズムの一翼を担ったシェムセッティン・サーミーの兄で詩人。1884年にアルバニア語誌『光 *Drita*』を創刊、また児童文学を通じた母国語教育に力を入れるなど、アルバニア文学の発展に多大な貢献を果たした。晩年もアルバニア学校の開校を援助するなど、精力的に活動した。
- (13) Aḥmad ‘Arābī (1841-1911)。1854年に士官学校に入学、卒業後すぐに頭角を表したが、そこでチェルケス系軍人の優遇政策に直面、アラブ系軍人の地位向上を求めた。この動きは、財政破綻とヨーロッパ勢力の内政干渉の最中にあったことを背景に、アラビー革命と呼ばれる反ヨーロッパの主張に基づく民族主義運動に発展する。しかし1882年に逮捕され、その後セイロン島への流刑と帰国を経て1911年にカイロで生涯を閉じた。
- (14) トルコ語で「赤い頭」を意味する。もともとサファヴィー教団の信奉者であるトルコ系遊牧集団を指していたが、サファヴィー帝国の脅威が去ったあとも、アナトリアにおいてオスマン政府に反抗的な人々について用いられた。
- (15) 初出では、「プロバガンダの手先」。
- (16) トルコ語、ペルシア語、アラビア語のこと。
- (17) 初出では「その精神を高貴なものにしなければ」。
- (18) 初出では「クルド人たちとアルメニア人たち」。
- (19) 第5章相当の論考が発表された1913年は、統一と進歩委員会のトルコ人と地方のアラブ人のあいだで、集権分権論争が活発に行われた時期であった。分権派アラブ人は、1913年6月にパリでアラブ会議を開催し、徴兵等地方行政上の権限移譲・アラビア語を教育言語として使用すること・アラビア語を公用語化することなどを求めた。政府もこれに合意して同年8月には改革のための勅令を発しており、これはアラビア語誌『マナール』にも掲載された。George Antonius, *Arab Awakening: The Story of the Arab National Movement*, Philadelphia: J. B. Lippincott Company, 1939, 114-17; 藤波伸嘉『オスマン帝国と立憲政——青年トルコ革命における政治、宗教、共同体』名古屋大学出版会、2011、281; Reshad, “Iṛāda al-Sulṭaniyya,” *al-Manār*, 16 (1913): 720. しかし、勅令の内容がアラブ人の求めた分権からは程遠いものであったため、アラブ側からは中央集権的な政府を批判する声が上がった。Al-‘Aẓm, Rafiq, “Bayān li al-Umma al-‘Arabiyya min al-Ḥizb

- al-Lāmarkaziyya,” *al-Manār*, 16 (1913): 849-58.
- (20) 原文はアラビア語。ハディースを改変させたものであり、もとは「自身を知る者は神をも知る」。Ziya Gökalp, İbrahim Kutluk tr., *Türkleşmek İslâmlaşmak Muasırlaşmak*, Ankara: Devlet Kitapları, 1976, 52（クトルクによる脚注）。
- (21) 初出は「トルコ人の政府によって」。
- (22) Hülegü（位1258頃-65）。イル・ハン朝初代君主で、モンゴル帝国の祖チンギス・ハンの孫。モンゴル帝国の大カンである兄モンケの命を受けシリア方面への遠征を行う。1258年にバグダードを征服、アッバース朝を滅ぼした。
- (23) この段落は、初出では「トルコ主義者にとって、そのナショナルティ *milliyet* はトルコ性、その国際性 *beynelmileliyet* はムスリムたることである。わたしの考えでは、さらに、トルコ主義者の国際的 *beynelmilel* プログラムがなくてはならない」。なお本訳稿では逐一指摘しないが、ギョカルプは初出時に随所で用いている「*beynelmilel*」を、単行本刊行時、基本的に「*ümmet*」に修正している。
- (24) 初出では、第3条のあとに、「すべての民族でヒジュラ暦をもとにした共通の太陽暦を制定すること」とある。
- (25) 初出では「クルド人」。
- (26) 本章の初出は、[Ziya] Gökalp, “İslâm Terbiyesinin Mahiyeti,” *İslam Mecmuası*, 1 / 1 (1329), 14-16. 英訳として、Ziya Gökalp, Niyazi Berkes tr. and ed., *Turkish Nationalism and Western Civilization: Selected Essays of Ziya Gökalp*, London: George Allen and Unwin, 1959, 233-35.
- (27) セリム3世が行った諸改革全般のことを指す。原義は「新体制」。同名の洋式軍団が設立され、それと並行して財政改革や大使館の設置などが進められた。
- (28) 初出では「トルコ民族 *Türk milliyeti*」。
- (29) 初出では「リュシュディとイダード *rüşdi ve i'dad*」。
- (30) 初出では「『思想の叙述』紙は」。
- (31) 初出では「諸伝統 *‘ananeler*」。
- (32) 本章の初出は、*Türk Yurdu*, 5/8 (1329), 1088-1093. 英訳として、Ziya Gökalp, Berkes tr. and ed., *Turkish Nationalism*, 66-70.
- (33) 本来は、イスラム法などの解釈において、イスラム学者が知識や推論をもって解釈にたどりつくことを指す。
- (34) 1806年10月14日、プロイセンがイエナとアウエルシュテットの戦いでナポレオン軍に大敗し、10月27日にプロイセンの首都ベルリンが占領されたことを指す。
- (35) Johann Gottlieb Fichte (1762-1814)。ドイツ観念論を代表する哲学者のひとり。1807年12月から翌年3月にかけて、ナポレオン占領下のベルリンにおいて「ドイツ国民に告ぐ」を講演し、国民教育を主題にドイツの再興を説いた。
- (36) Jeanne d’Arc (1412頃 -31)。フランスの農民で、英仏百年戦争のさい啓示に基づきフランス国王シャルル7世となる王太子らに助力し、オルレアン解放やシャルルの戴冠に貢献。ブルゴーニュ公国軍に捕らえられ、最終的に異端として処刑された。

- (37) 出エジプトとイエス・キリストの誕生のこと。前者は、エジプト王の圧政下にあるイスラエルの民が、預言者モーセに従いエジプトを脱出、シナイ山にて神と契約を結び十戒を授かったことを指す。後者は、紀元1世紀のローマ帝国統治下のパレスチナで、キリスト教の開祖となるイエスが誕生したことを指す。
- (38) アッラーの警告に耳を傾けず滅ぼされたアード族の伝説上の都市。円柱や壮大な宮殿、家畜の群れ、豊かな果樹園や庭園を特徴とする。楽園や繁栄した地の比喻として用いられる。
- (39) フランスで1789年、憲法制定議会在全会一致で封建的特権と領主制の廃止を決定したことを指す。
- (40) 1870年7月普仏戦争でプロイセンが勝利したのち、1871年1月にプロイセン王ヴィルヘルム1世を初代皇帝とし、22君主国、3自由都市からなるドイツ帝国が成立したことを指す。
- (41) 1867年11月の徳川慶喜による大政奉還、翌年1月の王政復古の大号令および3月の五箇条の御誓文、1889年2月11日に公布された大日本帝国憲法を指すものと思われる。
- (42) 人間の行為は、自由意思に基づくものではなく、神の予定によって強制されているとする立場。
- (43) *icâz*. 前半訳では「名誉」と訳出したが、今回は「威信」とした。なお、*Prestige* のみ冒頭小文字なのは原文ママ。
- (44) 預言者ムハンマドに啓示を伝えたとされる大天使。キリスト教やユダヤ教ではガブリエルと呼ばれる。